

# 教材研究と教材の扱い方 (14)

——「扇的」(『平家物語』)——

菅原敬三

『平家物語』の中から「扇的」を取り上げて、教材研究  
と教材の扱い方について考えてみたい。但し、ここで取り

## 資料1 (平成五年版)

扇的——『平家物語』から——

中山義秀 訳

治承四年(一一八〇)八月、伊豆で旗揚げをした源頼朝は、やがて鎌倉を本拠地と定め、東國の武士たちを結集した。いっぽう、同じ年の九月、頼朝と呼応して信濃で兵を挙げた木曾義仲は、北陸の戦いで平家を打ち破り、寿永二年(一一八三)七月、余勢をかって京へ攻め上ってきた。平家の人々はこれを防ぎきれず、都を捨て、西國へと落ちた。翌寿永三年、ようやく勢力を盛り返して一ノ谷に陣を構えた平家は、頼朝の弟、義経の率いる平家追討軍の奇襲に遭い、たちまち敗走して海へ逃れ、隠岐に退いて源氏を迎え撃とうとした。元暦三年(一一八五)二月、義経は、わずかな手勢とともにあらしをついて海を渡り、平家の背後から突如として隠岐へ攻め寄せた。慌てた平家は船を浮かべて海上に逃れ、陸の源氏と相対した。

扇如

185 扇的

そのうちに、平家に背いて源氏を持っていた阿波・讃岐の武士たちが、かしの峰、この洞穴から、十四、五騎、二十騎と連れだってはせ集まってきたので、判官の軍勢はまもなく三百余騎になった。

「今日は日が暮れた。戦いはこれまで。」

と陣をひきかかっているところへ、沖のほうから、美しく装った小舟が「そう、みぎわへ向かってこぎ寄せてきて、五十間ほどの所まで近づくと、舟を横向きにした。「なんだらう。」と見ていると、舟の中から、年のころ十八、九歳ばかり、柳がさねの五衣に、紅のはかまを着けた女房が出て、紅地に金の日の丸をかいた扇を竿の先に付けて舟板のへり板に立て、陸に向かって手招きをした。判官は、後藤兵衛実基を呼んで、

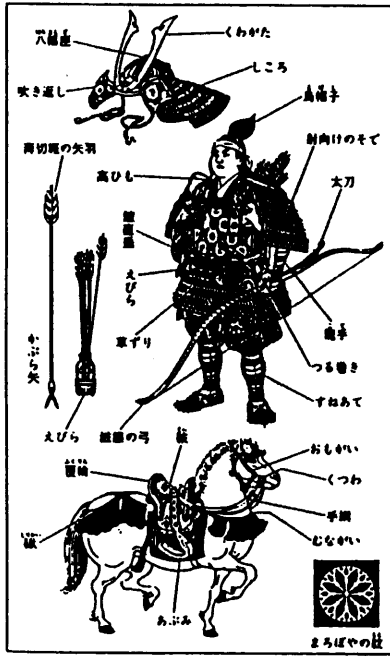
「あれはどういうことであらうか。」

と問うと、

「射よ、このことでございませう。もつとも、大將軍が矢おもてに進んで、美人を御覧になっているところを、弓の手だれがねらって射落とそうとするはかりこともありません。しかし、ともあれ扇は射させたがよろしかろうと存じます。」

阿波・讃岐  
今の徳島県と香川県  
判官  
義経は、このとき朝  
廷から判官という官名  
を与えられていた。  
五十間  
一間は約一・八メー  
トル。  
柳がさね  
表が白裏が青の配色。  
五衣  
五枚重ねて着る女子  
の正装。  
女房  
もと、宮中に仕立を  
賜った身分の高い女官。  
転じて、貴族・武家な  
どに仕える女性。  
後藤兵衛実基  
義経の女義経にも仕  
えた古い家来。

峰、沖



「このたび鎌倉を立て、西国へ向かうとする者は、皆我徒の下知に従わねばならぬ。それが嫌ならば、即刻この場より鎌倉に帰ったがよい。」

「まする。」

判官は怒って、

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

与一は、

「いかに宗高、あの扇の真ん中を射て、敵に見物させよ。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

「てまえの力では及びませぬ。射損じましたならば、味方にとつて長く弓矢の恥となりましょう。必ずしとげるほどの者に仰せつけられるべきかと存じます。」

・紺袂

手だれ  
 下野國  
 今の本木  
 御入り  
 扇の下に着る衣服  
 明實おとし  
 明實色の糸で扇の裏をつつり合わせたもの  
 足金(太刀のきやに付いている、ひもを通すための金具)に扇を使用したもの  
 切腹の矢  
 白に黒いまだらが切れたように入っている羽を付けた矢  
 ぬた目  
 波のような模様のある扇の角  
 かぶら矢  
 香をたてて飛ぶように作った矢。開戦の間などに用いる。  
 遊樂の弓  
 黒塗りの上に白い線をきつしりと巻いた上等の弓  
 高ひも  
 扇の柄を扇につらめひし。

「かの若者ならば、確かに射当てるに相違ない。」  
 それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

「この若者ならば、確かに射当てるに相違ない。」

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

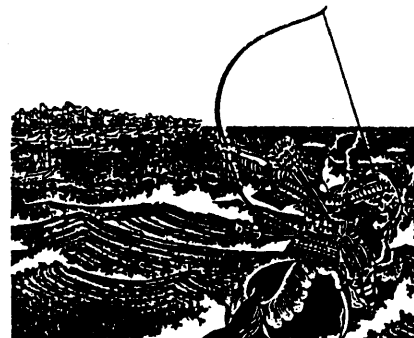
それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。

それは、判官も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間あまりはあると見えた。



小房の旗  
 小房の旗の付いた旗(旗を固定させるための、尾から掛けるひも)  
 まろびやの紋  
 ほや(やどり木)を円形に模倣化した紋  
 寶具すり  
 眞鍮の鍍金を漆にはめ込み、彫いて模様をすり出した細工  
 金屋  
 旗の前後の山形の部分を集めて織り出したもの  
 矢ころ  
 矢を射るに適當な距離

・紋

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、感打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りすゑ深へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならざといふことぞなき。与一目をふさいで、「兩無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓

時は二月十八日、午後六時ごろのことであったが、おりから北風が激しく吹いて、岸を打つ波も高かった。舟は、揺り上げられ揺り落とされ上下に漂っているの、竿頭もそれにつれて揺れ動き、しばらくも静止していない。沖には平家が、海上一面に舟を並べて見物している。陸では源氏が、馬のくつわを連ねてこれを見守っている。どちらを見ても、まことに晴れがましい情景である。与一は目を閉じて、「兩無八幡大菩薩、我が故郷の神明、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中を射させたまえ。こ

・い漂

切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。いま一度本國へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。」と心のうちに折念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつびいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、神には平家、ふなばたをたたいて感じた

り、陸には源氏、えびらをたたいてとよめきけり。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの纏着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける

れを射損じれば、弓を折り、扇をかき切つて、再び人にまみえる心はありませぬ。いま一度本國へ帰そうとおぼしめされるならば、この矢ははずさせたまふな。」と念じながら、目をかっ開いて見ると、うれしや風も少しおさま

り、的の扇も静まって射やすくなつていた。

与一は、かぶら矢を取つてつがひ、十分に引き放つてひやうど放つた。小兵とはいひながら、矢は十二束三伏で、弓は強し、かぶら矢は、浦響くほど長鳴りするやうな音をたて、あやまたず扇の要から一寸ほど離れたところをひいふつと射切つた。かぶら矢は

飛んで海へ落ち、扇は空へと舞い上がった。しばしの間に舞っていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつと散り落ちた。夕日に輝く白い波の上に、金の日輪を描いた真赤な扇が漂つて、浮きつ沈みつ揺れているのを、神では平家が、ふなばたをたたいて感嘆し、陸では源氏が、えびらをたたいてはやしだした。

あまりのおもしろさに、感に堪へなかつたのであろう、舟の中から、年のころ五十歳ばかり、黒革のおどしの纏を着、白柄の長刀を持つた男が、扇を立ててあつた所

十二束三伏  
「束」は一握り  
「三伏」は三握り  
「折念」の意、  
「伏」は指一本の  
幅をいう、舟通  
の矢の長さは十  
二束であつたと  
いう。

一寸  
約三センチ  
ノットル  
ひいふつ  
矢が風を切り、  
的に当たつた音  
は浦響く

かかやいたる  
昔は「かかや  
く」と清音で発  
音した。

えびら  
矢を差して背  
に負う道具。  
黒革をどし  
黒い革ひも  
扇の板をつつり  
合わせたもの。  
白柄  
白木で作つた  
柄

所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御定ぞ、つかまつれ。」

と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつびいて、しや類の骨をひやうふつと射て、舟底へさかさまに射倒す。

平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてとよめきけり。

「あ、射たり。」

と言ふ人もあり、また、「情けなし。」

と言ふ者もあり。

に立つて舞を舞つた。そのとき、伊勢三郎義盛が、那須与一の後ろへ馬を歩ませてきて、「御定であるぞ、射よ。」

と命じたので、今度は中差を取つてしつかりと弓につがひ、十分に引き放つて、男の扇の骨をひやうふつと射て、舟底へまっかさまに射倒した。平家方は静まりかえつて音もしない、源氏方は今度はえびらをたたいてとよめきけり。

「ああ、よく射た。」

と言ふ人もあり、また、「心ないことを。」

と言ふ者もあつた。



《訳者》中山義秀 二六〇(昭和三三) 福島県出身、小説家。一九六五年日本芸術院賞受賞。作品に「厚物吹」「陣」「テニヤンの末日」「吹塵」「信夫の鷹」などがある。

《出典》「平家物語」鎌倉時代に成立した軍記物語で、源氏との抗争を中心に、約五十年にわたる平家の興亡のありさまを述べたものである。作者は、信濃・前野行光といわれるが、はっきりしない。「源氏物語」の源氏、源氏無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おこれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」という冒頭の文章に見られるように、人生をはかないものとする仏教の無常観を基調としながら、古代から中世へと移り変わる社会の動きと、新時代の担い手となった武士の姿を生きたと描いている。文章は、漢語を巧みに交えて、独特の調子とリズムがあり、「平曲」(平家琵琶)として、琵琶法師によって語られ、広く民衆に親しまれた。原文の部分は、「平家物語 下」(日本古典文学大系 33)による。訳文の部分は、「平家物語」(日本古典文学大系 13)による。

資料2 (平成十四年版)

扇の的——「平家物語」から——

十二世紀の後半、平安時代の末期に榮華を誇った平家一門は、地方で反旗をひるがえす源氏の勢力によって、徐々にその基盤を揺さぶられる。

治承四年(一一八〇)八月に源頼朝が伊豆で放逐げし、九月には同じ源氏一族である木曾義仲が信濃で兵を挙げる。一進一退が続くなか、平家一門の柱となつて君臨した平清盛が病死する。

北陸での戦いで義仲の軍に大敗した平家は、寿永二年(一一八三)、京の都を捨て、西国へと落ちていく。

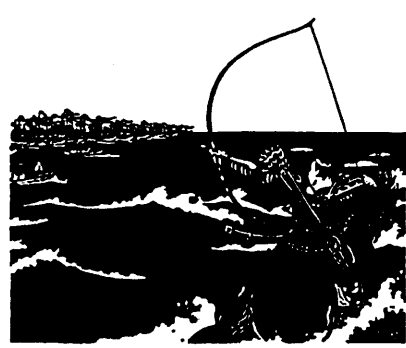
翌寿永三年、九州まで落ち延びた平家は、軍勢を整えて押し戻し、一ノ谷に陣を敷く。いっぽう、頼朝の弟、義経は、海沿いに万全の備えをした平家軍の、その背後の急峻な山から奇襲をかける。総崩れとなつた平家は、海上に逃れ、海を渡つて四国の屋島に退き、そこで源氏を迎え撃とうとする。

元暦二年(一一八五)二月、義経の軍勢は、あらしをついて海を渡り、平家の背後から突如として屋島へ攻め寄せた。慌てた平家は船を浮かべて海上に逃れ、陸の源氏と向き合った。

さてそのとき、一そうの小舟が、岸に向かってこぎ寄せる。中から若く美しい女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸の源氏に向かって手招きをする。射よ、との合図のようであった。

義経は、下野の國の住人、那須と一に命じて射させようとする。弱冠二十歳の与一は、一度は辞退するが、命令に抗しがたく、ただ一騎海に乗り入れ、はるか四十間、余り先の扇の的にねらいを定めた。

敵味方の者すべてが、かたずをのんで見守っている。源氏全軍の名誉と那須一族の浮沈がこの一矢にかかっているのだ。



一扇、基盤、揺さぶる

源頼朝

二二二二二

後に鎌倉に幕府を興した東家政治の創始者、伊豆は今の静岡県

の東部地方、木曾義仲

二二二二二

源頼朝、義経の長男、源朝光の木曾で育った。頼朝のいとこ、平清盛

二二二二二

一六七年に太政大臣となった。一ノ谷

今の兵庫県神戸市須磨区の海岸にある。

二二二二二

頼朝の末弟、源朝光

今、香川県高松市北側にあった。今は陸奥の地。

女房

もと、軍中に那須を賜った身分の高い女官。既して、貴族、武家などに仕える女性。

下野の國、今の栃木県

四十間

一間は約一八メートル

二一騎

(原文と口語訳は、平成五年版と同じ)

国語 2 光村図書 平成五年版

両資料を比較すると、平家物語の原文と口語訳の付いている箇所(教材の後半部)は同じであるが、平家物語の原文に至るまでの解説部が異なっている。ここに面白い問題が見出せる。

両資料の文章の構成は、次のとおりである。平成五年版の「扇の的」は、四角に入った解説文と、逐語訳ではないが平家物語の訳文、それに原文と原文の下に付けられた口語訳、の四通りの文章で成り立っている。

一方、平成十四年版は、原文に至るまでの経過を解説した解説文、それに原文と原文に付けられた口語訳との三種類の文章から成っている。平成五年版と平成十四年版の二種類の文章を比較すると、様々なことが分かってくる。なお、平成五年版の訳文は逐語訳ではないが、原文を口語訳したものである。逐語訳したものを現代の我々が読むと、不自然な言葉遣いとなって読みづらい。接続助詞の使用が現代文としては不自然であったり、会話文の前後に「言ふ」旨の言葉が重複したりするため、それを避けてなおかつ現代の我々が読みやすいようにしたものである。

平成五年版と平成十四年版を並べて学習すると、単独でそれぞれの文章を学習するよりも、様々な表現や内容を学

ぶことができる。

平成五年版の四角に入った解説文は、平成十四年版の中では解説文の一部となって、少し叙述が詳しくなっている。

この教材の解説文の役割としては、経過説明が中心である。長い期間にわたっての状況を簡単に解説するのであるから、要点を押さえた表現にならざるをえない。

平成五年版の解説の部分が、平成十四年版の解説では、どの範囲の文章になるか比較すると面白い。平成五年版に比較して、平成十四年版の方が経過の叙述が詳しく、しかもより物語的である。「翌、寿永三年、九州まで落ち延びた平家は、軍勢を整えて押し戻し、そこで源氏を迎え撃とうとする。」は二つの文章で成り立っている。平成五年版の文章では「翌寿永三年、ようやく勢力を盛り返して一ノ谷に陣を構えた平家は、く源氏を迎え撃とうとした。」の一文である。平成十四年版の文章では、一文を使って説明したものが、平成五年版では「ようやく勢力を盛り返して一ノ谷に陣を構えた(平家)」とあるように、「平家」を修飾する表現となっている。解説する文章表現を学習するには恰好の材料となる。字数を制限して表現しなければならぬ場合には、どのように表現するとよいか、この文章を教材として学習ができる。

また、平成十四年版の「さてそのとき、一そうの小舟が岸に向かつてこぎ寄せる。く源氏全軍の名誉と那須一族の

浮沈がこの一矢にかかっているのだ。」の部分と平成五年版の該当部分の文章を比較すると、解説文と訳文の違いが明らかとなり、両者の文章としての働きが学習できる。

また、平成十四年版の解説は、平家物語の本文につなぐために、より物語に近い解説になっている。一方、平成五年版の解説は要点が短くまとめられており、解説の役割を強くした文章である。四角で囲んでいるのも、後に続く訳文、物語の本文との違いを明確にする意図がうかがえる。異なる文章を、どのようにつないでいくのがよいか、その良き手本となるであろう。

表現というものは目的に応じて変えなければならぬということの学習は、以上の点からも明らかであり、表現学習としては大切にしたところである。

次いで、平成五年版の四角に入った解説文が一段落でできあがっているのに比べて、平成十四年版の解説では、五つの段落から成っている。この段落の数を比較して、段落を設けることの意義や段落の役割を考えさせるのも面白い。

### 三

前述したように、平成十四年版では状況を解説する文章であったものが、平成五年版では訳文を当てている箇所がある。解説文は、事の経過を説明するのが役割であるが、

訳文は物語の展開を現代の言葉に置き換えたとは言うものの、内容は物語である。物語や小説は全てを言い切らず、省略したり、大切なものを隠したりする。従って、物語の文章を深く読むことによつて、問題点が浮かび上がってくる。訳文であつても、古典の授業が成立することを、模擬授業風に展開した指導試案によつて示したい。また、平家物語の本文に対しての指導も併せて示す。

### 「扇の的」

——「平家物語から」——

中山 義秀 訳 光村図書

#### 〔指導試案〕

##### 指導計画

四時間

##### 第一時

- ・平家物語の文学史的位置を知らせる。
- 又、本文の平家物語の中での位置を知らせる。(或は又、本文に至るまでの概略を知らせる。)

- ・全体を通読し、全体の構造をとらえさせるとともに、本時の扱う範囲(一八五頁一行〜一八六頁七行)を示す。

- ・扇の的を示された義経と、後藤兵衛実基の対処(相談)の実際をとらえさせる。
- ・義経と実基の会話から、武士としての

生きざまや、判断の特質をとらえさせる。

##### 第二時

- ・本時で扱う範囲(一八六頁八行〜一八八頁一六行)を示す。

・義経と与一との会話を通じて、両人の置かれた立場と人となりをとらえさせる。

##### 第三時

- ・本時で扱う範囲(一八九頁一行〜一九〇頁八行)を示す。

・扇の的に向かう与一の心理と武士としての彼の覚悟を読み取らせる。

(晴れの舞台に立つ与一の心理と武士としての彼の覚悟を読み取らせる。)

##### 第四時

- ・本時で扱う範囲(一九〇頁七行〜一九二頁一六行)を示す。

・扇の的をみごと射切った与一の喜びと、源・平両氏の観衆の賞賛を、朗読を通じて味わわせる。

・感に堪えず踊りだした平家の武士を射なければならぬ与一を通じて、武士の置かれた宿命を読み取らせる。

指導過程

第一時

・文学史の説明、通読、全体の構造(段落)の把握〔略〕

〔発問〕

- 1・本文全体の構造を把握しましたが、今日は訳文の一八六頁七行までを扱います。
- 2・扇的を示された源氏方の義経は実基に相談しますが、相談をもちかけたところから、実基は義経にとってどういう人物だということがわかりますか。——(家来であり相談役)
- 3・二人が相談している言葉を抜き出して整理して見ましょう。——(板書)
- 4・二人の言葉から、相談する側とされる側の言葉づかいがよくわかります。
- 5・実基の返事は、相談した義経の気持ちを満足させたものでしたか。会話1、2を検討してみましょう。
- 6・実基は、平家側から出された問題に対して、「『射よ』とのことでございましょう」と「謎解き」を行っていますが、それ以外に対応策として、二つのことを提示していますが、それは何ですか。

① 計略があるか → 用心の必要

② 射る → 武士の名誉にかけても

相手の要求に応える

7・こういう言葉は、どのような立場に置かれた者だから(或は、置かれ続けたから)言える言葉だと思いますか。  
(難しいようですから今の段階では保留しておきましょう。)

8・実基のような判断は、義経にはありません。なぜこういう解釈をするのか、実基の置かれた立場を説明するとどうなりますか。——  
↓ 戦場  
にはどのような計略があるかわからないから注意すべきだという参謀としての立場がわかります。

9・義経の「誰かいるか」という言葉に対して、実基は与一を推薦しますが、推薦するに値する人物ですか。推薦すべき条件として、実基は何を挙げていますか。——  
↓

10・それは、相談した人物に納得してもらえる条件でしょうか。言葉を換えて言いますと、「扇的の射る」人物としての条件を与一は満たしていると思いますか。——  
↓

11・義経は実基の言葉に納得して「では呼べ」と答えています。「扇的」を射るべき人物として那須与一が浮かび上がったということになります。那須与一が浮かび上がったところで今日は終

わりです。

〔板書〕

義経

- 7 「では呼べ。」(納得)
- 5 「証拠は。」
- 3 「誰かいるか。」
- 1 「あれはどういうことであろう。」

2 「射よ」とのことです。ごさいましよう。」

(謎解き——参謀としての判断・発言)

計略があるか——用心の必要

↓相反する条件を満たす必要あり

(武将でなく腕の立つ家来が必要)

射る——武士としての名誉

を重視

4 「与一」(候補者として推薦)

6 「飛ぶ鳥を、三つに二つは射落とす」(候補者としての十分な条件を満たす)

後藤兵衛実基

第二時

〔発問〕

12・今日扱う範囲は、一八六頁八行〜一八八頁一六行までです。内容的には、一八八頁六行を境として前半と後半とに分かれます。前半では、義経と与一の会話に込められたそれぞれの人物の心情に、又後半では、扇の的に向かう与一の姿に注意して読んでいきましょう。

13・前半では、義経と与一が言葉を交わしていますが、その実際をつかんでいきましょう。——板書

14・与一を呼んだ義経の言葉は、「いかに宗高、あの扇の真ん中を射て、敵に見物させよ。」となつています。なぜこういう言い方になるのか、考えてみなければなりません。扇を射ることができるとどうかと与一に確認しないで、直接命令を下しているのはどうしてでしょうか。それは、義経のどういう立場を物語っていますか。

15・では、主君の命令に対しての与一の返事を検討してみましよう。与一はなぜ黙って義経の命令に従わないのでしょうか。「てまえの力ではおよびませぬ。」云々という言葉は、与一のどういう気持ちから出ていると思えますか。



16・与一の返事に対する義経の反応も変わっています。与一の返事に対して、彼は「怒って」いますが、義経は何を怒っているのですか。どういうことに対して義経は怒りをおぼえているのですか。そして、それは義経のどういう立場を物語っていますか。

17・では、二人の会話の最後の部分です。義経から怒られた与一ですが、君命でもいいではないですか。なぜ与一は自分の判断を尊重して東国に帰らないのですか。自分の主張を貫かないのは、どうしてですか。

18・そうですね、武士として生きていけないんですよ。本文にも、そのことはしっかり書いてあります。どの表現ですか。そうですね、「君命辞しがたく」という表現です。状況を見極め判断するのは武将である自分で、その命令に従うのがお前だということなのですね。武将と臣下の立場がよく出ているところです。

19・義経の命令に対して、与一は「しからば、当たりはずれはとにかく、仰せのとおりつかまつりましょう。」という言葉を残して御前を退きます。ここまでは前半です。

後半は、与一が扇的に向かう場面です。源氏の

つわものどもは与一の後ろ姿を見送って、「かの若者ならば確かに射当てるに相違ない。」と思い、義経もそう思うのですが、何がそういう判断に結び付けたと思いますか。二つのことがわかりますが、それは何ですか。

〔板書〕

義経

主君としての発言（状況判断して、命令を下すのは自分だ）

3 「義経の下知に従わねばならぬ。」——怒って、再び命令

1 「あの扇の真ん中を射て、敵に見物させよ。」（源氏の名を上げる）——命令

2 「射損じましたならば、味方にとって長く弓矢の恥となりましょう。」——辞退（なぜ辞退する）

4 「しからば——仰せのとおりつかまつりましょう。」  
臣下としての判断（武士の名誉——失敗は許されない）

与一

第三時

〔発問〕

20・今日から古文の本文を読むことにします。なぜ、

この部分が古文の原文になっているかと言いますと、最も劇的な場面だからです。本文の構成に注目しますと、三つの部分から成り立っています。

A、B、Cとつけてください。A、B、Cはそれぞれどういう場面を示しているか、考えてみてください。

Aは扇を射る前、Bは扇を射た時、Cは男を射た時のことですね。今日はAの部分を読むことにします。まず、私が通読しますが、その場の状況や与一の気持ちがとらえられるように聞いてください。

（音読、その後生徒二名にも指名読み）

21・Aの部分は、与一が扇の的を射る場面です。地方出身の武士にとっては願ってもない晴れの舞台ですね。覚悟を決めて与一は扇の的に向かいますが、与一がすぐに的を射ることができなかったのは、

どういふ事情によりますか、まずここから考えてみましょう。一つには、前時で扱ったように距離が遠かったということです。確実に射るために、彼は「海へ六間ばかり馬を乗り入れ」ますが、それを①としますと①以外に二つほどの条件があります。それを指摘してみてください。

①「北風激しくて、——扇もくしに定まらずひらめいたり」

②「沖には平家、舟を並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。」

22・そうですね、②は自然条件の悪さですね。③は、「（源平）いづれもいづれも晴れならず」といふのとありまますように、その場の全員が見ているというプレッシャーですね。「ずくなき」といふのは、二重否定を表していて、強い肯定を示しています。全員が見ているという心理的圧迫感が、彼をしてすぐに的に向かわせていないんですね。失敗が許されない与一ができることは何か。何が彼にできるか、まとめてみてください。

23・そうですね。神に祈るということです。よく考えてみてください。絶対に失敗の許されない彼は、二つのことを行っています。何でしょうか、よく考えてまとめてみてください。

①一つは沢山の神にお願いしたということだ。す。「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神」と、彼が信頼できる神々にすべてをお願いしたということだ。ふだんはこれほど多くの神々には、お願いしないはずですね。

②もう一つあります。失敗すれば、生きていないという覚悟を決めたということですね。源平両氏が見ているという晴れ舞台ではあっても、成功してこそその晴れ舞台であって、失敗すれば与一だけでなく源氏にとつても恥辱の舞台になる訳ですね。ここが大事なところです。

24・では与一が神に祈った成果はありましたか。

①そうですね、自分自身の気持ちを落ち着けたというのと、

②「目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなったりける」

とありますように、自分が願った二つの条件が揃ったことになりました。そこで「与一よつびいてひやうど放つ」た訳です。

では、与一の心情が十分理解できたところで、もう一度読んでみることにしましょう。

〔朗読を試みる〕

〔板書〕

扇の的 (平家物語)

場面 A

ころは二月十八日の酉の刻 (午後6時ごろ)

与一

A 扇射られず

①自然条件の悪さ

- ・をりふし北風激しく
- ・磯打つ波も高かりけり
- ・舟は揺り上げ揺りすゑ漂ふ
- ・扇もくしに定まらずひらめいたり

②見物人の多さ

- ・源氏も平家も見物する
- (心理的プレッシャー)

海上 (舟を一面に並べて見物す) 平家

陸上 (くつばみを並べて見物す) 源氏

第四時

〔発問〕

25・今日は場面B、Cを読むことにします。Bも、Cも与一は弓を射ますが、「何を射たのか」、そしてその時の「源平両氏の反応はどうであったか」を

平家（舟を一面に並べて見物す）海上	
<p>(扇)</p> <p style="text-align: center;">B ←</p> <p>扇を射る条件整う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 風も少し吹き弱り</li> <li>・ 扇も射よげになつたりけり</li> </ul>	<p style="text-align: center;">2</p> <p>覚悟を決める (失敗↓死)</p> <p>源氏全軍の名誉 那須一族の浮沈</p>
源氏（くつばみを並べて見物す）陸上	

見ていくことにします。

26・場面B、Cで、与一は何を射たか。まずとらえておきましょう。

↓そうですね、Bでは「扇の的」を、Cでは「五十ばかりなる男」を射ています。

27・そして、その時の源平両氏の反応はどうですか。

↓Bでは「沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり」

とありますように、平家も源氏もともに称賛の拍手を贈っています。

しかし、Cでは源氏が「えびらをたたいてどよめきけり」、「情けなし」という複雑な反応を示したのに対して、平家は「音もせず」という反応しか残してありません。

どうしてそのような反応を示したのか、その問題は時間が要りますので、もう少し後ですることにします。

28・Bを見てください。表現面では、顕著な特徴があるのがわかります。少なくとも三つの特徴がありますが、それは何でしょう。(生徒作業)

①「ひやうど(放つ)」「ひいふつと(ぞ射切

つたる)」「さつと(ぞ散つたりける)」とありますように、擬声語を沢山使用しています。なぜ場面Bに、これほど多くの擬声語が用いられているのでしょうか。随分作者は力を入れて書いてありますが、ここに表現の工夫がありますね。動きが目の前に浮かぶように書かれています。よく味わわなければなりません。

②次には、「かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上りける」、「浮きぬ沈みぬ」、「沖には平家——陸には源氏」、「ふなばたをたたいて感じたり——えびらをたたいてどよめきけり」とありますように、対句を沢山使用しています。ここにも、作者の表現の工夫があります。

③最後に、「取つてつがひ」「よつびいて」とありますが、この表現は元々は「取りてつがひ」「よく引きて」とあるべきところですが、発音しやすいように、「取つてつがひ」「よつびいて」と変わった部分です。こういうふうに変わることを音便といいいます。他の箇所にも沢山出てきますね。朗読するのにいいようにという作者の工夫です。

まとめて言いますと、Bの部分は臨場感がでるようには作者が特に力を込めて書いている部分です。その場の雰囲気がよく分かるように、また表現の工夫がよく味わえるように、上手に朗読したいところです。

朗読の練習をしつかりしましょう。

29・上手に読めたところで、残った問題を考えることにしましょう。源氏と平家の反応についてです。

30・もう一度確認をしておきましょう。Bにおいて、源氏も平家も何に対して拍手を贈ったのですか。

↓与一の弓の技量に対してです。

そうですね、それに対して源平ともに称賛の拍手を贈っています。

31・では、Cにおいて、「五十ばかりなる男」を射たことに対しての、称賛する側と(これは主に源氏ですが)沈黙する側(平家と源氏の一部の人々ですが)とでは、どういう気持ちの違いがありますか。

称賛 ↓ 難しいのに二度もよく射

た。

沈黙(批判) ↓ 無益な殺生だ。

32・ここで、躍りだした男まで「射よ」と命じた義経の気持ちを考えてみなければなりません。なぜ義経は、この男を「射よ」と命じたのですか。「御

定ぞ、つかまつれ」という言葉は、本文の前の部分のどの箇所と呼応していますか。捜し出してみてください。ここは大事な部分です。時間がかかってもいいですから、よく考えて探してみてください。

→そうですね。一八五頁一三行目の言葉があるからこそ、この男は射られた訳ですね。大將軍を射落とす男かもしれないから、射られた訳です。

それに対して、沈黙（批判）した側の反応は、無益な殺生に対する冷たい反応ということになります。戦に命をかけなければならなかった武士の運命が出ている部分です。悲しいまでの武士の運命と言っているかもしれません。

33・ここで、もう一つの問題に対して考えてみなければなりません。那須与一の問題です。伊勢三郎義盛の言葉に、なぜすぐに反応して男を射たかという問題です。時間ありませんので、ここは私の方から説明しておきます。

「御定ぞ、つかまつれ」という言葉は、与一に反論の余地を与えない厳しい言葉だということですね。与一にできたことは、出された命令をすぐさま実行するということだけです。だから、ここに

34・は与一の心理は書かれていません。最後に、今まで学習したことをまとめておきましょう。臨場感あふれる戦の場面と自分の置かれた立場で精一杯生きている武士の姿が、学習した二つの大きな内容です。それぞれの立場で生きた武士の姿を、もう一度まとめておきましょう。

①義経 — あらゆる状況判断を行い、命令を下す。

②伊勢三郎義盛 — 参謀として、様々な判断を行い敵の計略に対処する。

③那須与一 — 技量をもって、名前を上げなければならぬ。臣下として主君の命令には絶対的に従わなければならない。

（すがわら けいぞう 本学教授）